

# 携帯メールにおける 絵文字使用に関するアンケート 分析結果報告

岩田班

0309116 板野 築  
0309118 岩田嘉津信  
0309131 木村華子  
0309155 廣瀬義人

# はじめに

今回は日本語学基礎演習1において、本講義を受講している学生を対象に携帯メールにおける絵文字の使用度をアンケート調査法を用いて調査した。

# 調査対象者

日本語学基礎演習1を履修している日本大学  
文理学部生19人。

男女の内訳は、男性12人、女性7人。有効回答  
数は19だった。

# 調査内容

I. 当てはまるもの一つに○をつけてください。

- ①性別(男女)
- ②携帯電話の所持(有無)
- ③一日当たりの平均送信通数(数字で記入)

II. 以下の相手に携帯メールを送る場合、絵文字を使用しますか。

(以下、選択肢はそれぞれ1.使う 2.場合によって使う 3.使わないとした。)

- ①親しい同性の友達に送る場合
- ②親しくない同性の友達に送る場合
- ③親しい異性の友達に送る場合
- ④親しくない異性の友だちに送る場合
- ⑤同じサークルに所属している先輩に送る場合
- ⑥同じ内容を同級生のみで構成されたクラス全員に送る場合

# 仮説

- ①同性に送る場合、男性よりも女性のほうが絵文字の使用率が高い。(板野)
- ②相手が親しいほど、男性は絵文字の使用率が低く、逆に女性は高い。(板野)
- ③目上の人に対して送るメールにおける絵文字の使用率は低い。(廣瀬)
- ④個人宛よりも集団宛のメールのほうが絵文字の使用率が低い。(木村)
- ⑤普段、メールの発信数が多い人ほど絵文字の使用率が高い。(岩田)

# 仮説①

担当:板野

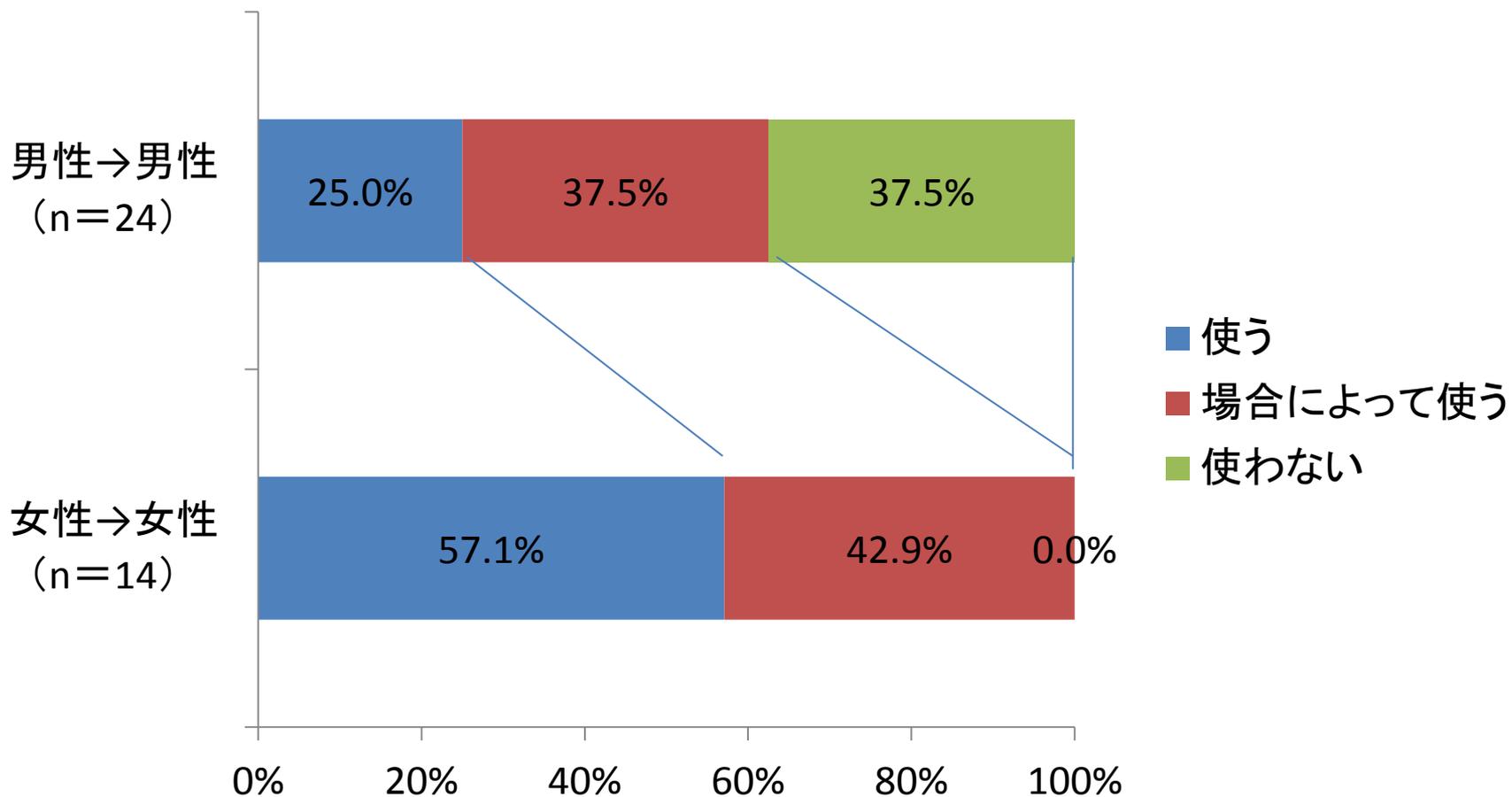
- 同性に送る場合、男性よりも女性のほうが絵文字の使用率が高い。

# 使用した質問項目

- ① 親しい同性の友達に送る場合
- ② あまり親しくない同性の友達に送る場合

①②を合わせて「同性に送る場合」とし、得た結果をグラフにした。

# 仮説検証① 同性に送る場合の男女それぞれの絵文字使用率 (図1)



# 結果①

- 男性は同性の相手に対して絵文字を「使わない」と答えた人が37.5%いたが、女性は「使わない」が0%であったため、仮説どおりの結果となった。

# 仮説②

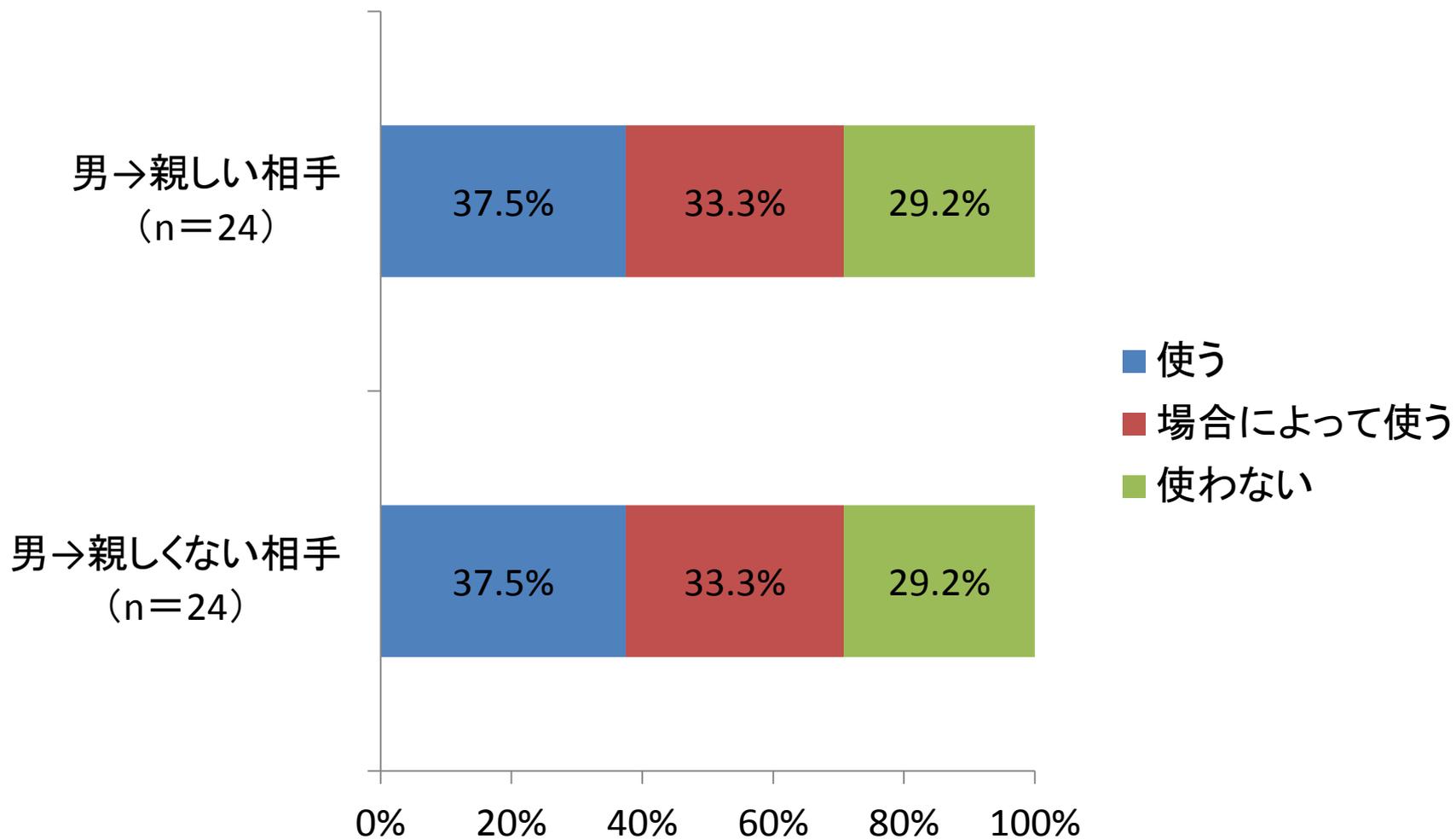
担当:板野

- 相手が親しいほど、男性は絵文字の使用率が低く、逆に女性は高い。

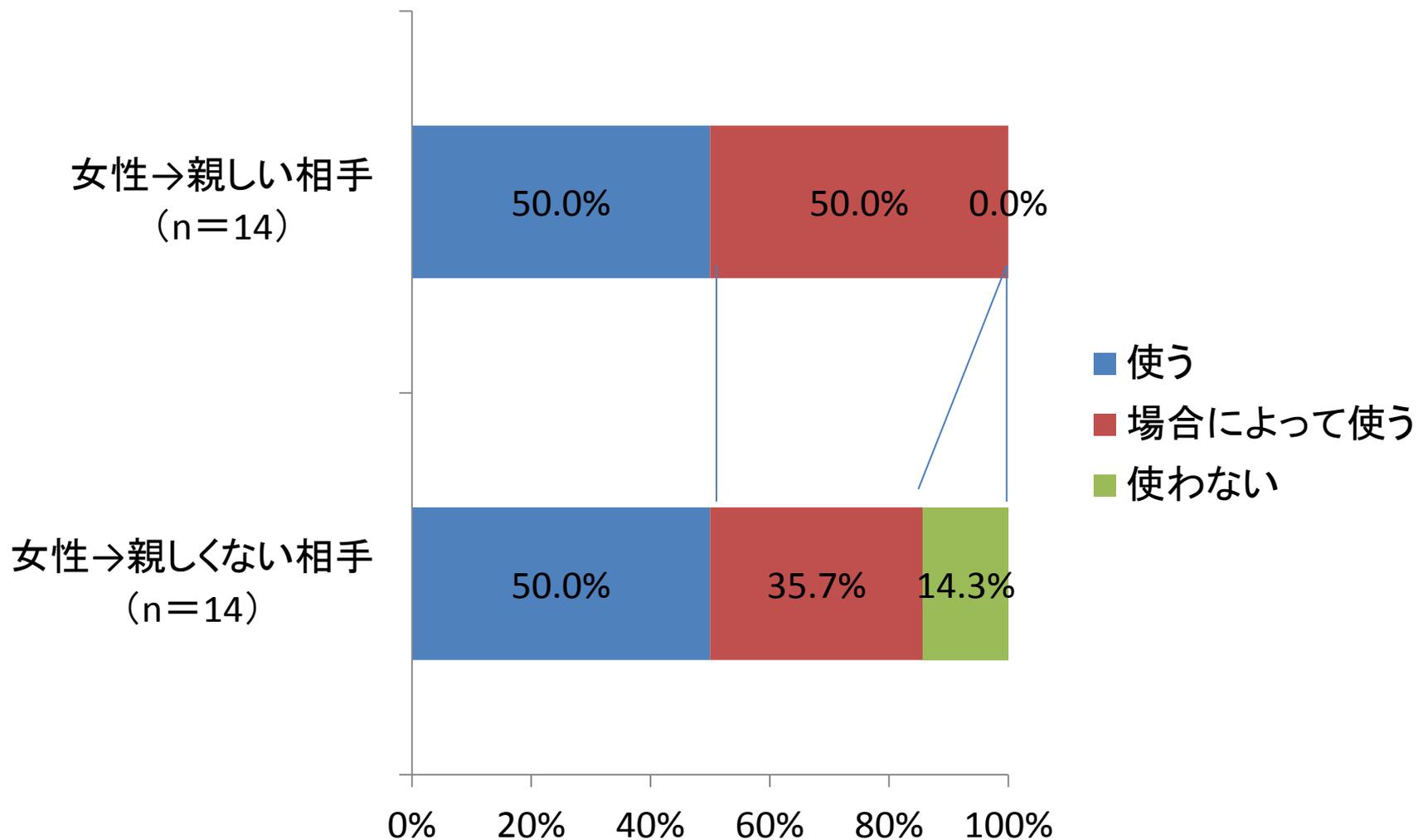
# 使用した質問項目

- ① 親しい同性の友達に送る場合
  - ② あまり親しくない同性の友達に送る場合
  - ③ 親しい異性の友達に送る場合
  - ④ あまり親しくない異性の友達に送る場合
- ①③を「親しい相手」、②④を「親しくない相手」とし、その結果の使用の割合をグラフにした。

## 仮説検証② 親疎での絵文字の使用率の変化: 男性 (図2)



## 仮説検証② 親疎での絵文字の使用率の変化: 女性 (図3)



## 結果②

- 図2を見ると、男性は親しい人・親しくない人の使用率に変化がなかったため、親疎によって絵文字の使用頻度は変化しないという結果となった。一方図3では、女性は親しくない相手には「使用しない」という人が14.3%いるが、親しい相手には絵文字を「使用しない」と答えた人は0%であったため、仮説どおりの結果になった。

# 考察

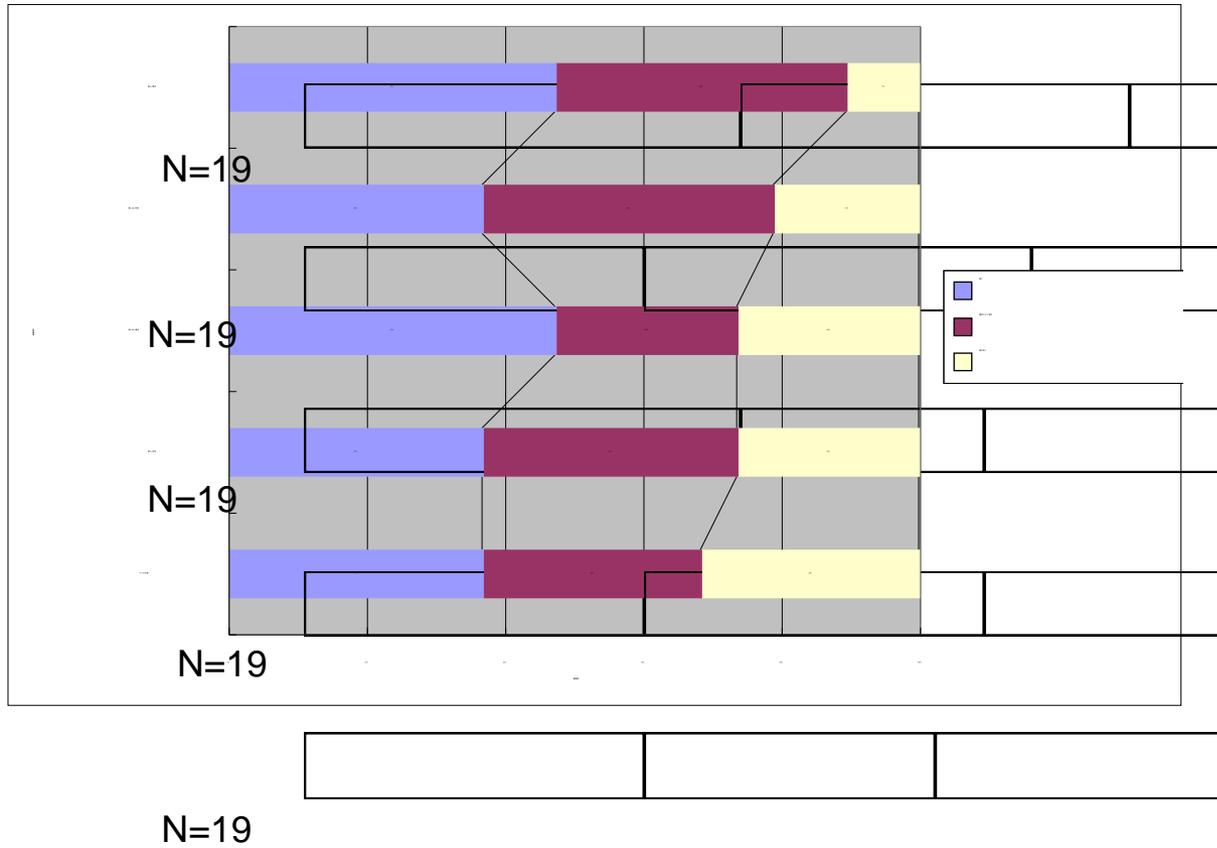
- 女性は誰にでも絵文字を使う傾向にあるが、これは女性が男性よりも感情を表に出す傾向にあるからではないか。小林(2001)では『本来絵文字には ①感情を豊かに表現する②相手の気持ちを和ませ無用な衝突を避ける③単なる装飾 の3つの機能があるとされている』と述べている。そして、V・P・リッチモンド J・C・マクロスキー(2006)では『アメリカの心理学者であるアルバート・メラビアンの研究によって、女性は男性よりも明らかに親和的な傾向にあることがわかっている』と述べている。さらに同著では『親和傾向とは自分が相手に対してどれだけ友好的かを示す行動である』と述べており、友好を感情を表現することで示しているのではないか。
- 男性が同性よりも異性に絵文字を使う傾向にあるのは、女性が普段絵文字を多く使うことを知っていて、親しみ易さを出すために自分も使う、ということなのではないか。さらにこれは個人的な見解だが、今回の調査対象者が全員大学生ということもあり、「異性に良く思われたい」という気持ちから絵文字を使うこともあるのではないかと推測した。

# 仮説③

目上の人に対して送るメールにおける  
絵文字の使用率は低い

担当：廣瀬義人

# 結果比較



# 結果

- 「使わない」の割合が一番低い「親しい異性」に比べ、2割以上増加し、最も高くなった。
- また、「場合によって使う」の割合も2番目に低く、サークルの先輩相手には、絵文字は使わない、もしくは使いにくい相手という認識を持っていることが分かった。

# 考察

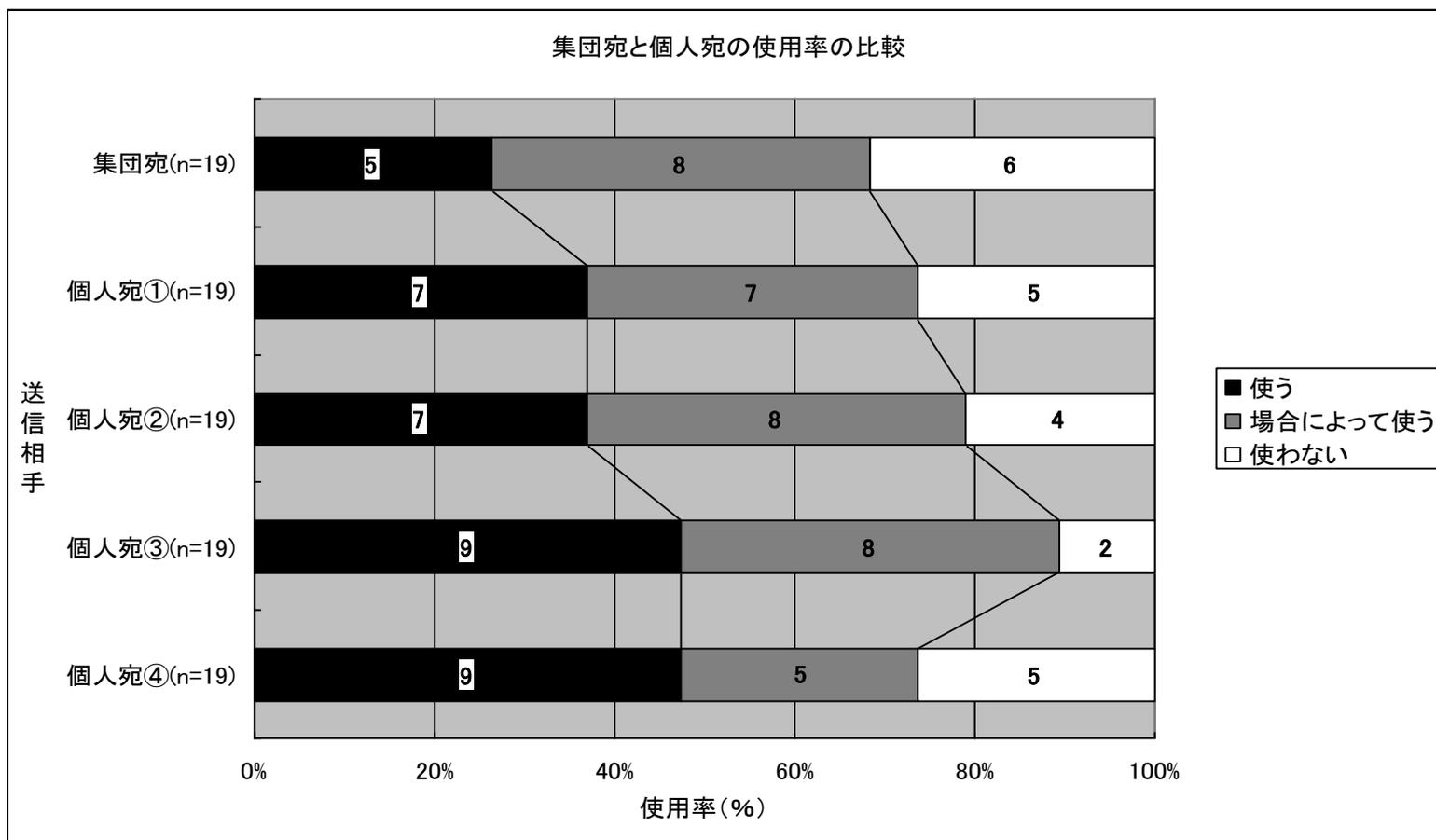
- ・今回の調査では、おおよそ仮説どおりの結果を得ることが出来た。親しくない相手や異性に対し絵文字を使い、積極的に感情を伝えようとする意識・行動とは異なり、あくまで「先輩」＝「目上の人」という存在を意識し、事務的で感情を抑えたメールになりがちなのではないだろうか。
- ・親しい同性に送信するメールにも絵文字を「使わない」と答えた人が多かったが、これは先輩に対し敬意を払い、絵文字を使用しないのとは異なり、気心の知れた仲なので「使う必要がない」と判断しているためだと思われる。

# 仮説④

- 個人宛のメールよりも集団宛のメールのほうが絵文字の使用率が低いのではないか？

担当:木村 華子

# 仮説検証



個人宛・・・①: 親しい同姓 ②: 親しくない同姓 ③: 親しい異性 ④: 親しくない異性

# 結果

- わずかではあるが、個人宛よりも、集団宛のほうが「使う」の割合が少なく、「使わない」の割合が多いことから絵文字の使用率が低くなっていることがわかる。
- 集団宛の場合、「場合によって使う」の項目が最も多かった。

# 考察①

- 集団宛で最も多かった「場合によって使う」というのは、個人宛の親疎による使用率の結果に基づくと、送る集団が親しい場合は使うが、あまり親しくなかったり、気を使うような相手の場合は使わないと、送る集団によって使用するかを定める人が多いと考えられる。

## 考察②

- 絵文字には、より感情のニュアンスをわかりやすく伝えようとする傾向がある(立川 2005)が、クラス全員に送る同報のメールには、そのような感情を表す必要性はほとんど無い。また、絵文字の働きのひとつとされる、「装飾」も、この場合、あまり必要性を感じられない。

⇒よって集団宛のメールほうが個人宛のメールよりも、絵文字の使用率が低くなるのではないかと考えられる。

# 仮説

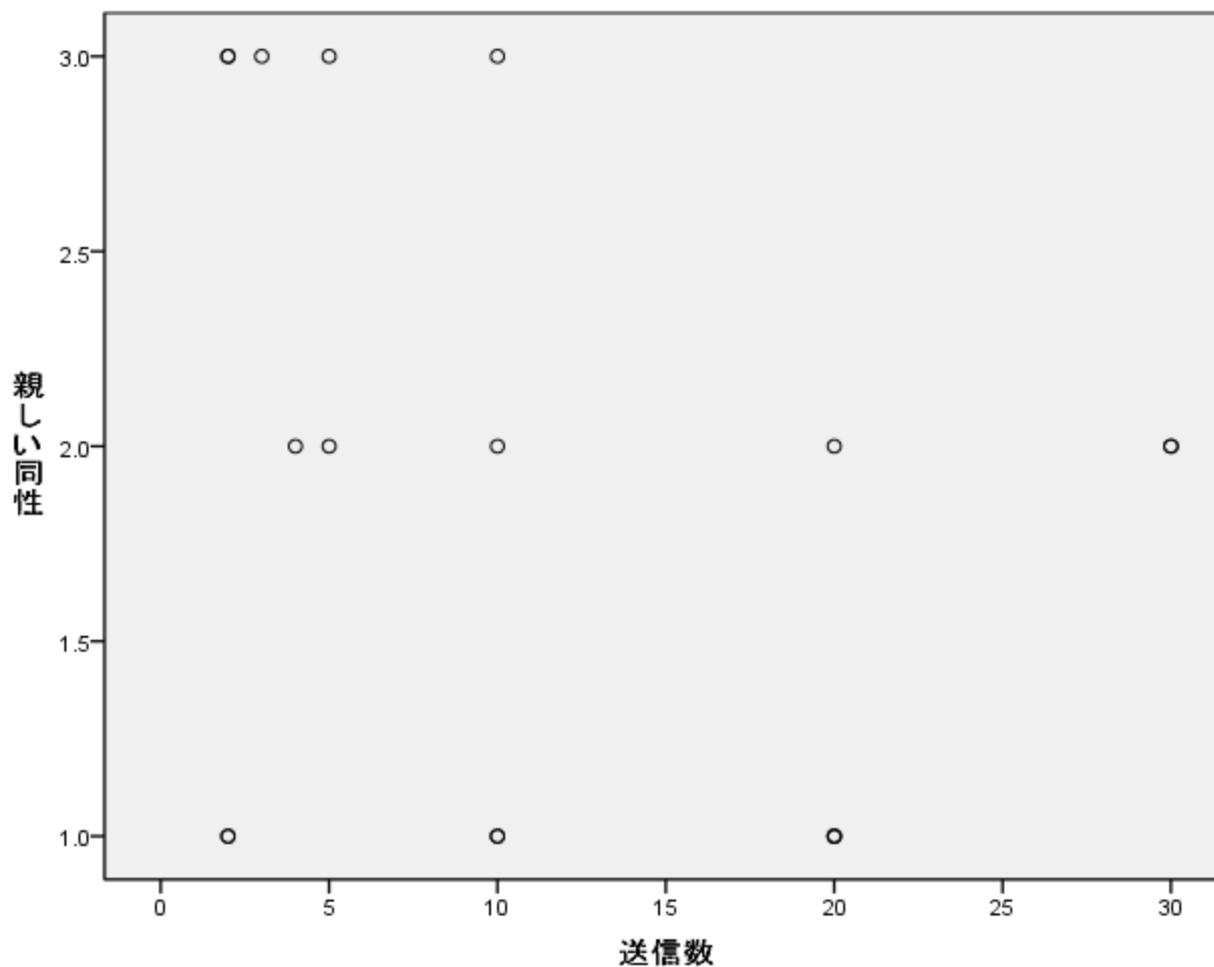
- どの場合でもメールの送信数が多い人ほど絵文字の使用率が高く、少ない人ほど低いのではないか

各項目の番号はアンケートの選択肢で使った

- 1、使う→1. 0
- 2、場合によって使う→2. 0
- 3、使わない→3. 0

とする。

# 親しい同性に対しての散布図

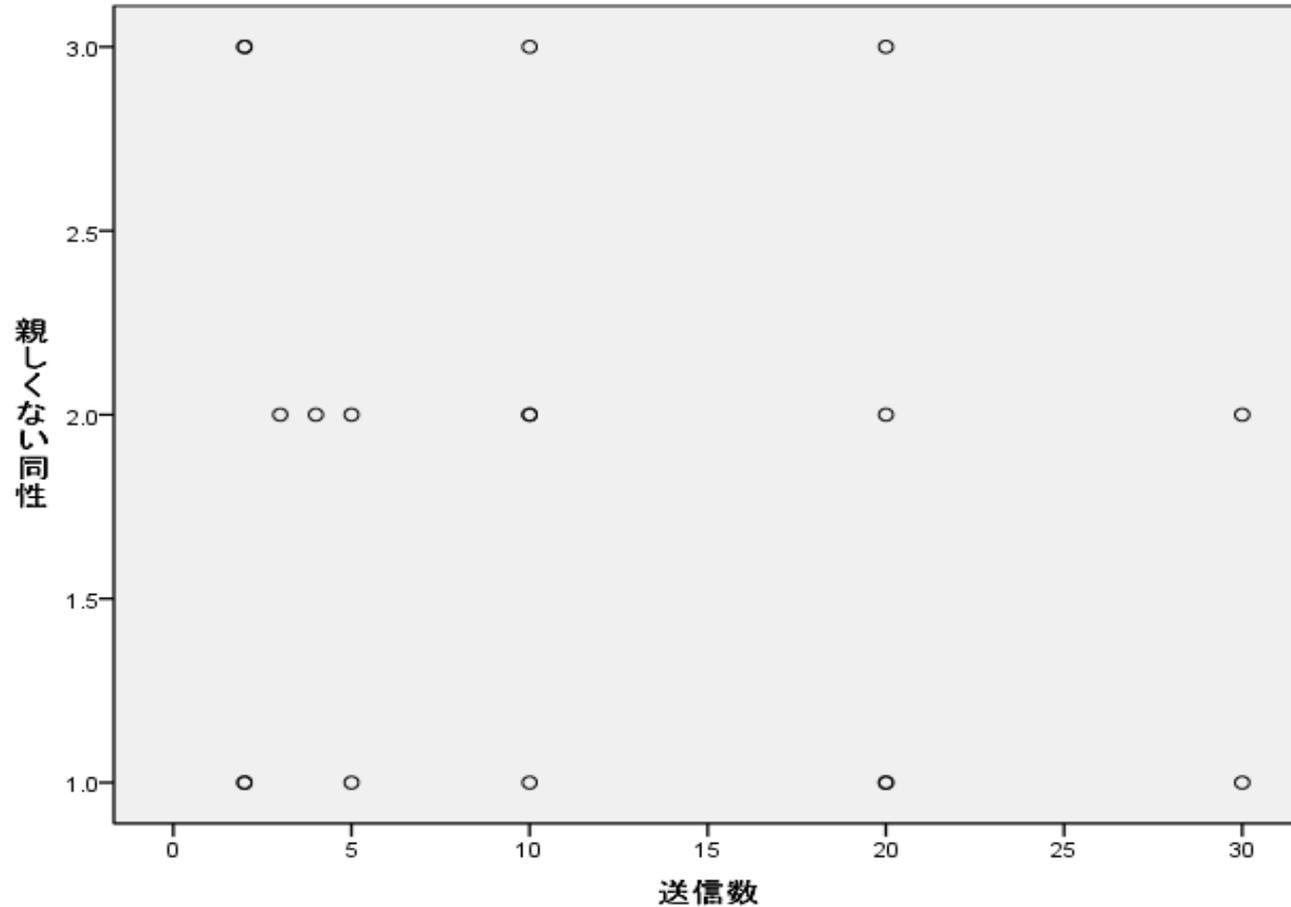


# 親しい同性に対してメールを送る時の絵文字の使用率の相関係数

## 相関係数

		送信数	親しい同性
送信数	Pearsonの相関係数	1	-.290
	有意確率 (両側)		.244
	N	18	18
親しい同性	Pearsonの相関係数	-.290	1
	有意確率 (両側)	.244	
	N	18	19

# 親しくない同性に対しての散布図

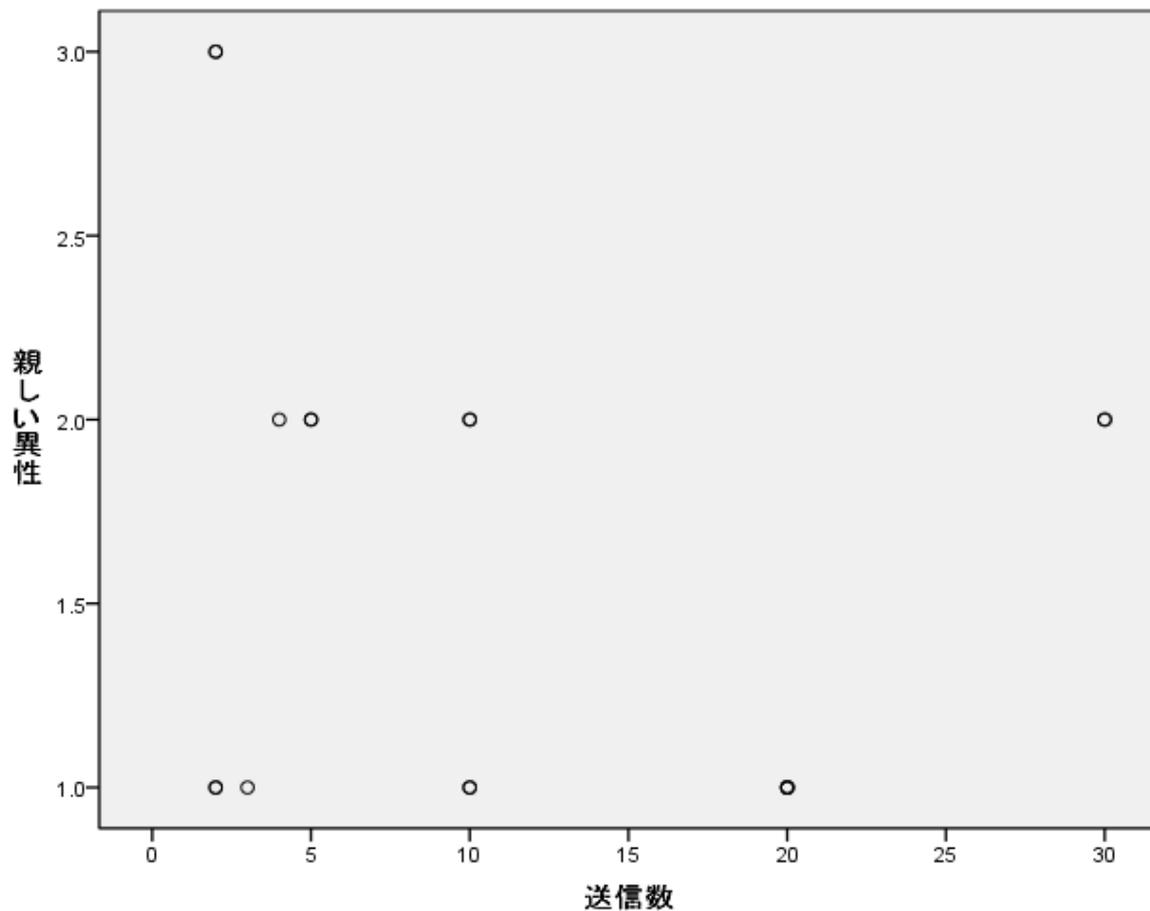


# 親しくない同性に対してメールを送る時の絵文字の使用率の相関係数

## 相関係数

		送信数	親しくない同性
送信数	Pearsonの相関係数	1	-.163
	有意確率 (両側)		.518
	N	18	18
親しくない同性	Pearsonの相関係数	-.163	1
	有意確率 (両側)	.518	
	N	18	19

# 親しい異性に対しての散布図

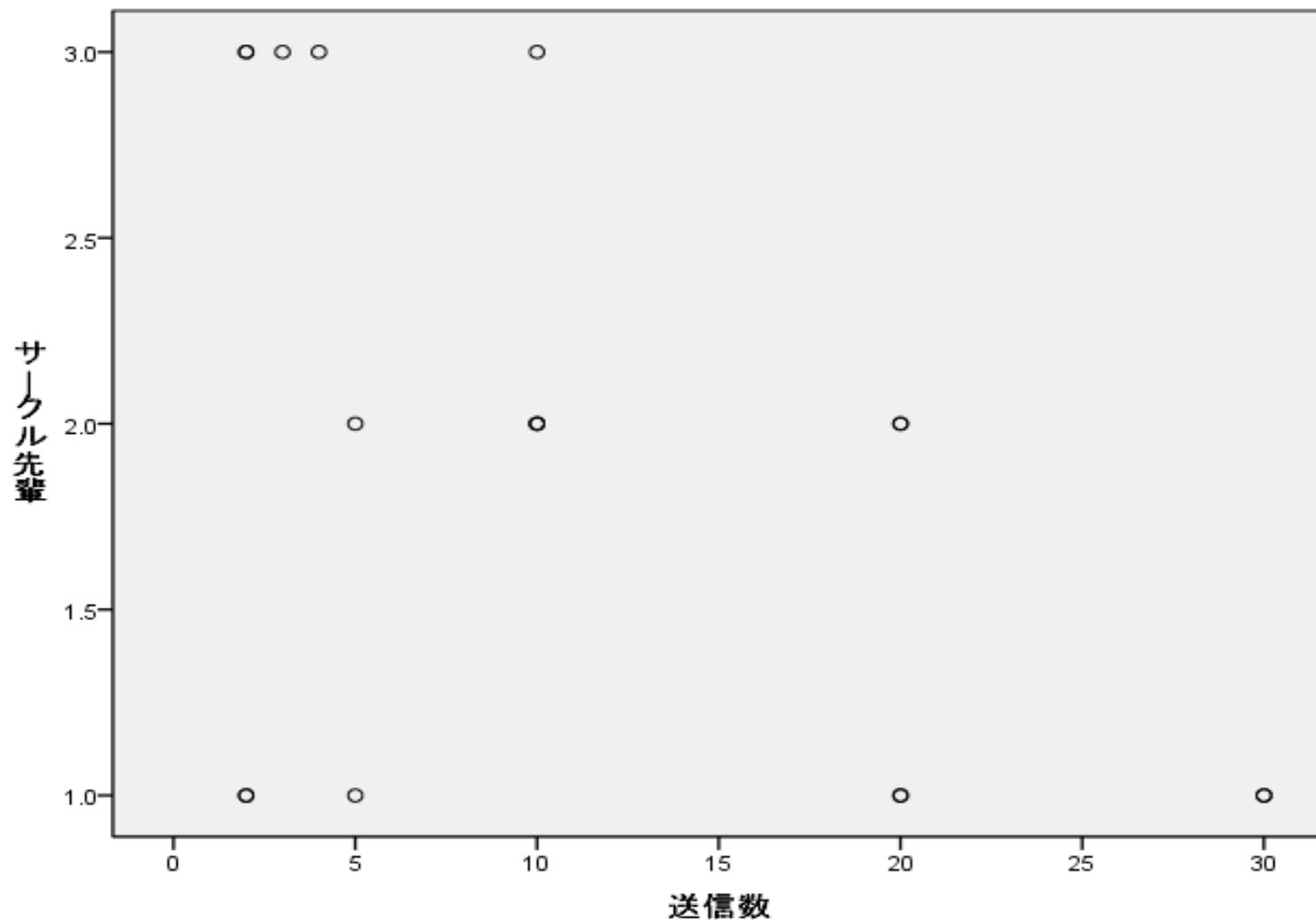


# 親しい異性に対してメールを送る時の絵文字の使用率の相関係数

## 相関係数

		送信数	親しい異性
送信数	Pearsonの相関係数	1	-.205
	有意確率 (両側)		.414
	N	18	18
親しい異性	Pearsonの相関係数	-.205	1
	有意確率 (両側)	.414	
	N	18	19

# サークルの先輩に対しての散布図



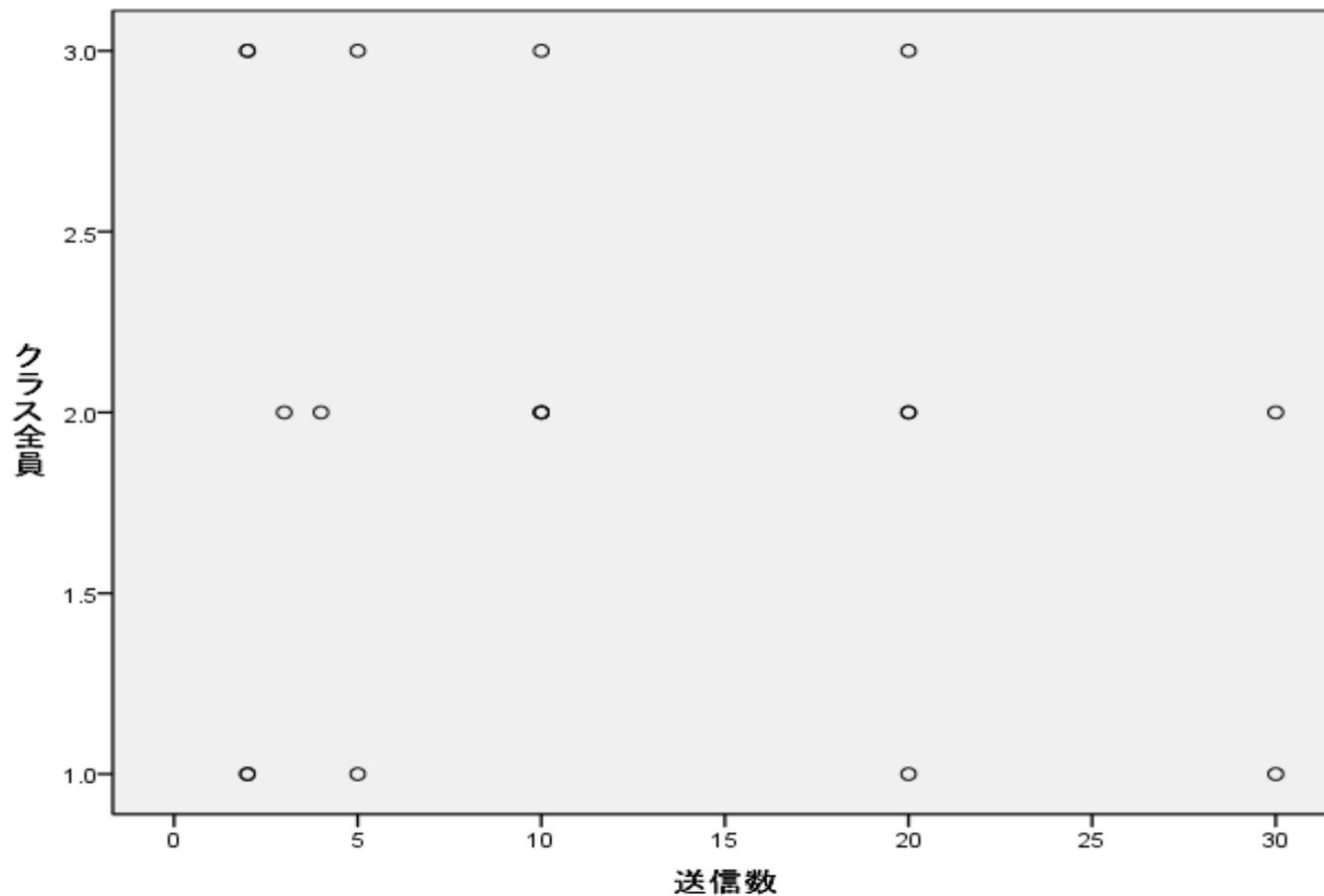
# サークルの先輩に対してメールを送る時の絵文字の使用率の相関係数

## 相関係数

		送信数	サークル先輩
送信数	Pearsonの相関係数	1	-.482 <sup>*</sup>
	有意確率 (両側)		.043
	N	18	18
サークル先輩	Pearsonの相関係数	-.482 <sup>*</sup>	1
	有意確率 (両側)	.043	
	N	18	19

\*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

# クラス全員に対しての散布図



# クラス全員に対してメールを送る時の 絵文字の使用率の相関係数

## 相関係数

		送信数	クラス全員
送信数	Pearsonの相関係数	1	-.160
	有意確率 (両側)		.525
	N	18	18
クラス全員	Pearsonの相関係数	-.160	1
	有意確率 (両側)	.525	
	N	18	19

# 結果

- 相関係数を求めた結果、サークルの先輩、親しい同性、親しい異性、親しくない同性、クラス全体、親しくない異性の順番になった。最大が絶対値0.482で最小が絶対値0.052になった。平均は0.225になった。
- 親しい人に対してはメールの送信数が多い人ほど絵文字の使用率が高くなる傾向が出た。

# 考察

メールの送信数の多い人ほど、絵文字の意味や用途を理解しており、サークルの先輩などにも絵文字を使用できるのではないか。

# 全体のまとめ

調査人数が少なかったためか、全体的に数字の上で明確な結果を得ることは出来なかった。

しかし、少ないながらもほぼ全ての項目で仮説通りの結果を得ることができたのも事実である。男女や親疎の関係によって使用率が変わるといった結果や、目上の人物や集団へ送るメールは、あくまで社会常識を踏まえて作成されるなどの傾向を把握することが出来た。

新事実を発見するといったようなことはなかったが、今回の模擬調査により、現在の携帯メールにおける絵文字の使用率が確認出来たのではないだろうか。

調査対象人数を増やすことにより、今回の調査結果とはまた異なった結果が出る可能性は十分あるが、それはまたの機会に期待したいと思う。

# 参考文献

- 小林正幸(2001)「なぜ、メールは人を感情的にするのか」
- V・P・リッチモンド J・C・マクロスキー (2006)「非言語行動の心理学 対人関係とコミュニケーション理解のために」
- 立花結花(2005)「日本大学文理学部国文学科2004年度卒業論文 若年層の携帯電話メールにおける各種記号の使用—メールのテキスト分析と意識調査」
- 田中ゆかり(2005)「携帯メールにおける『キブン』表現」語文121 p131-119